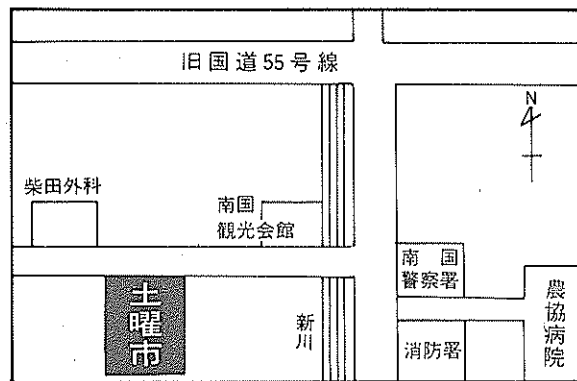




▲土曜市全影



▲会場では入口部分が駐車場にあてられ、市民を待っています。

土曜日

新たにオープン

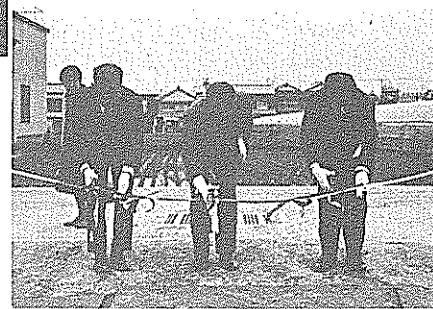


▲新鮮な野菜がとぶように売れる。

▼石本土曜市理事長、小笠原市長、吉村商工会長の3人の手によってテープカット。



▲オープンを記念して「もち投げ」会場いっぱい市民がつかめた。



が都市計画で「南国中央公園」としている場所、面積は約二千三百五十平方メートル。市と土曜市組合とが契約を結び、土曜日は土曜市が使用、土曜日以外の日には子供たちの遊び場として解放されます。

オープン記念式典は午前十時過ぎから行われ、石本貴一郎土曜市組合理事長が「みなさんの協力でここまでやってくることができた。今後は南国市になくはない土曜市、低価格で良心的な土曜市を目指して、市の発展に努力していきたい。」と

あいさつ。これに対して吉村商工会長や小笠原市長が「市民の生活、習慣になじんだ土曜市、どこにもまけない土曜市にしてください」と励ましの言葉を述べたあと、「もち投げ」を行いオープンを祝いました。

また、この日、土曜市の開設から八年間にわたり用地を提供していただいた山本尚一さん（後免町）に、土曜市組合より感謝状が贈られました。

市の特産物などを販売して市民の好評をえている「土曜市」が、五月七日、場所を従来の後免町から大地に移して、新たにオープンしました。

この土曜市はさる四十四年、市制十周年を記念してスタート、今年で八年目を迎えました。

現在は、季節の野菜をはじめ、植木、鮮魚、日用品など約八十店あまりが毎週土曜日に店を開きしています。

移転先は大正神母の本。南国警察署西側の南国観光会館と市原内科小児科の間を西へ約二百メートルです。ここは市

あさかじ

広報委員の目

野山の木々の緑も、一雨ごとに色を増し、髪を撫でて通る朝の風も、一きわ快く感じる今日この頃です。

そんな気持ちのいい朝、いつもさわやかに、「おはようございます」と挨拶してくださるお母さん、にこやかに「おはようございます」とおっしゃるお父さん、その方の挨拶はとっても明るくて誠意があふれて気持ちがよいのです。

一日の出発である朝のさわやかな一言の感触は、人間関係を深める第一歩でありお互いの信頼感を呼び合う潤滑油ともなるのですが、先日ある新聞に挨拶について興味ある記事が載っていました。難しい解釈はさておいて、ごく一般的な面だけ引用しますと「挨拶の挨拶の字には心を開くという意味、拶の字には心を開き人に迫るという意味がある。しかし最近はこの挨拶が忘れられたり、さわやかな感触が欠けたりする。現代これ

ほど人間精神の枯渇した空間が広がっている証左である。ではなぜ、あのさわやかな感触が欠けしてしまったのか、これについてあるテレビ司会者は、それは育てられたものでなく教えられたものであるからだと言及している。つまり知識としての言葉は忘れられ、親の言動と薫育を全身で呼吸しながら育っていく子供達の生きた言葉の継承の欠如を示すものだ」と。

なるほど、そういえばあのさわやかなお母さんの子供は、やっぱりお母さんそっくりの挨拶をしてくれます。教育とは幼児の場合には特に知識として教えるのではなく、親やまわりの大人の言動を通して育てることなのですね。子供達は、大人の言動と言葉を結びつけて意味を理解し表現していくのです。

さて、挨拶とは心を開いて人に迫るとありますが、人によって心を開いたり閉じたりしては挨拶になりません。かたくなに閉じた心では口先だけの挨拶になってもさわやかな感触は伝わりません。次代を担う子供達に正しい挨拶という言葉を継承するためにも、私達大人はみんなさわやかな挨拶を交したいものです。